

9 今後の渇水対応

少雨傾向の原因については諸説があるところですが、降水量は全国的にも1900年頃から減少の傾向にあります。特に関東地方の水源となっている利根川流域では、全国平均降水量の1,700mmに対して1,300mmと、全国的にみても降水量が少ない状況となっています。

このような中で、今後も予想される渇水に対して農業用水の利水団体は平常時から異常渇水に備える必要があります。当面の対応については以下の方針に基づいて準備を進めたいと考えています。

1) 連絡網の整備

渇水時においては、緊急を要することから正確な情報を迅速に伝える必要があります。このことから渇水時における土地改良区などの組織内連絡網、及び末端組織に至る連絡網の整備が必要になります。

2) 番水体制の整備

これまでに経験した渇水を参考として、各土地改良区などが自主的に行う番水体制を整備し、取水制限率、取水量に応じた手法を検討します。

3) ため池の利活用

農業用ため池は、古来から我が国の水田農業の水源の1つとして重要な役割を果たしていることから、渇水時のため池の効果的な利活用についても、今後検討していきます。

10 参考資料

1) 渡良瀬川沿岸地域における平成8年夏渇水

① 渇水の状況

A 降水量

平成8年渇水は、少雨傾向が前年の8月から続いた異常気象の影響により、これまでに経験したことのない大渇水となりました。

渡良瀬川流域における8月の降水量は、53mmで平年の22%（平年236mm）を記録し、この降水量も8月27日の降雨によるものであったことから極めて厳しい状況となりました。

B ダムの貯水状況

草木ダムの貯水量は、3月末には、1,670万m³（貯水率33%）まで低下したものの、5月中には貯水率98%まで回復しました。

しかし、梅雨も少雨が続いたことから7月29日には1,502万m³（貯水率49%）となり、その後は急激に貯水状況が悪化し、8月28日には貯水量は375万m³、貯水率12%（平年の16%）となりました。

